

# 源氏物語

蓬生

紫式部

青空文庫



道もなき蓬よもぎをわけて君ぞこし誰たれにもま

さる身のこちする  
(晶子)

源氏が須磨すま、明石あかしに漂泊さすらつていたころは、京のほうにも悲しく  
 思い暮らす人の多数にあつた中でも、しかとした立場を持つてい  
 る人は、苦しい一面はあつても、たとえば二条の夫人などは、源  
 氏が旅での生活の様子もかなりくわしく通信されていたし、便宜  
 が多くて手紙を書いて出すこともよくできたし、当時無官になつ  
 ていた源氏の無紋の衣裳いしやうも季節に従つて仕立てて送るような慰  
 みもあつた。眞実悲しい境遇に落ちた人というのは、源氏が京を

出発した際のこともよそに想像するだけであつた女性たち、無視して行かれた恋人たちがそれであつた。常陸ひたちの宮の末摘花すえつむはなは、父君がおかれになつてから、だれも保護する人のない心細い境遇であつたのを、思いがけず生じた源氏との関係から、それ以来物質的に補助されることになつて、源氏の富からいえば物の数でもない情けをかけていたにすぎないのであつたが、受けるほうの貧しい女王にょおう一家のためには、鹽たらひへ星が映つてきたほどの望外の幸福になつて、生活苦から救われて幾年かを来たのであるが、あの事変後の源氏は、いつさい世の中がいやになつて、恋愛といふほどのものでもなかつた女性との関係は心から消しもし、消えもしたふうで、遠くへ立つてからははるばると手紙を送るようなこ

ともしなかつた。まだ源氏から恵まれた物があつてしばらくは泣く泣くも前の生活を続けることができたのであるが、次の年になり、また次の年になりするうちにはまったく底なしの貧しい身の上になつてしまった。古くからいた女房たちなどは、

「ほんとうに運の悪い方ですよ。思いがけなく神か仏の出現なすつたような親切をお見せになる方ができて、人というものはどこに幸運があるかわからないなどと、私たちはありがたく思つたのですがね、人生というものは移り変わりがあつたものだといつても、またまたこんな頼りない御身分になつておしまいになるつて、悲しゅうございますね、世の中は」

と歎なげくのであつた。昔は長い貧しい生活に慣れてしまつて、だ

れにもあきらめができていたのであるが、中で一度源氏の保護が加わって、世間並みの暮らしができたことによつて、今の苦痛はいつそう烈はげしいものに感ぜられた。よかつた時代に昔から縁故のある女房ははじめてここに皆居つくことにもなつて、数が多くなつていたのも、またちりぢりにほかへ行つてしまつた。そしてまた老衰して死ぬ女もあつて、月日とともに上から下まで召使の数が少なくなつていく。もとから荒廢してやしきいた邸はいつそう狐きつねの巢ねのようになつた。気味悪く大きくなつた木立ちになく梟ふくろうの声を毎日邸の人は聞いていた。人が多ければそうしたものも影も見せない木精こだまなどという怪しいものも次第に形を顕あらわしてきたりする不快なことが数しらずあるのである。まだ少しばかり残つている女

房は、

「これではしようがございませぬ。近ごろは地方官などがよい邸を自慢に造りますが、こちらのお庭の木などに目をつけて、お売りになりませんかなどと近所の者から言わせてまいります、さうあそばして、こんな怖<sup>おそろ</sup>しい所はお捨てになつてほかへお移りなさいませよ。いつまでも残つております私たちだつてたまりませんから」

などと女主人に勧めるのであつたが、

「そんなことをしてはたいへんよ。世間体もあります。私が生きている間は邸を人手に渡すなどということとはできるものでない。こんなに恐<sup>こわ</sup>い気がするほど荒れていても、お父様の魂が残つてい

と思う点で、私はあちこちをながめても心が慰むのだからね」

女王は泣きながらこう言つて、女房たちの進言を思いも寄らぬことにしていた。手道具なども昔の品の使い慣らしたりつばな物のあるのを、生物なま識りの骨董こつとう好きの人が、だれに製作させた物、某の傑作があると聞いて、譲り受けたいと、想像のできる貧乏さを軽蔑けいべつして申し込んでくるのを、例のように女房たちは、

「しかたのないことでございますよ。困れば道具をお手放しになるのは」

と言つて、それを金にかえて目前の窮迫から救われようとする時があると、末摘花は頑強がんきやうにそれを拒む。

「私が見るようになと思つて作らせておいてくださつたに違いない

のだから、それをつまらない家の装飾品になどさせてよいわけはない。お父様のお心持ちを無視することになるからね、お父様がおかわいそうだ」

ただ少しの助力でもしようとする人をも持たない女王であつた。兄の禪師ぜんじだけは稀まれに山から京へ出た時に訪ねたずて来るが、その人も昔風な人で、同じ僧といつても生活する能力が全然ない、脱俗したとほめて言えば言えるような男であつたから、庭の雑草を払わせればきれいになるものとも気がつかない。浅茅あさじは庭の表も見えぬほど茂つて、蓬よもぎは軒の高さに達するほど、葎むぐらは西門、東門を閉じてしまったというと用心がよくなつたようにも聞こえるが、くずれた土堀どべいは牛や馬が踏みならしてしまい、春夏には無礼な牧童

が放牧をしに来た。八月に野分のわきの風が強かった年以來廊などは倒れたままになり、下屋の板葺いたぶきの建物のほうはわずかに骨が残っているだけ、下男などのそこにとどまっている者はない。廚くりやの煙が立たないでなお生きた人が住んでいるという悲しい邸やしきである。盗人というようながむしやらな連中も外見の貧弱さに愛想あいそをつかせて、ここだけは素通りにしてやって来なかつたから、こんな野の良藪らやぶのような邸の中で、寢殿しんでんだけは普通の飾りつけがしてあった。しかしきれいに掃除そうじをしようとするような心がけの人もない。埃ちりは積もつてもあるべき物の数だけはそろつた座敷すえつむに末摘すえつむ花はなは暮らしていた。古い歌集を読んだり、小説を見たりするこ

とでつれづれが慰められることにもなるし、物質的に不足の多い

境遇も忍んで行けるのであるが、末摘花はそんな趣味も持っていない。それは必ずしもよいことではないが、暇な女性の間で友情を盛った手紙を書きかわすことなどは、多感な年ごろではそれによつて自然の見方も深くなつていき、木や草にも慰められることにもなるが、この女王は父宮が大事にお扱いになつた時と同じ心持ちでいて、普通の人との交際はいつさい避けて友人を持つていないのである。親戚関係があつても親しもうとせず、好意を寄せようとしめない態度は手紙を書かぬ所にうかがわれもするのである。古くさい書物棚だなから、唐守からもり、藐姑射の刀自はこや、赫耶姫物語かぐやひめなどを絵に描いた物を引き出して退屈しのぎにしていた。古歌などもよい作よを選つて、端書きも作者の名も書き抜いて置いて見るのが

おもしろいのであるが、この人は古紙屋紙ふるかんやがみとか、檀紙だんしとかの湿り気を含んで厚くなつた物などへ、だれもの知つている新味などは微塵みじんもないようなものの書き抜いてしまつてあるのを、物思いのつのつた時などには出してひろ拈ひろげていた。今の婦人がだれもするやうに経を読んだり仏勤めをしたりすることは生意気だと思ふのかだれも見ると人はないのであるが、数珠じゆずを持つやうなことは絶対にない。こんなふうめのとに末摘花は古典的であつた。

侍従めのとという乳母の娘などは、主家を離れないで残つてゐる女房の一人であつたが、以前から半分ずつは勤めに出ていた齋院かがお亡かくれになつてからは、侍従もしかたなしに女王によおうの母君の妹で、その人だけが身分違いの地方官の妻になつてゐる人があつて、娘

をかしずいて、若いよい女房を幾人でもほしがる家へ、そこは死んだ母もおりふし行っていた所であるからと思つて、時々そこへ行つて勤めていた。末摘花は人に親しめない性格であつたから、おぼ叔母ともあまり交際をしなかつた。

「お姉様は私をけいべつ軽蔑なすつて、私のいることを不名誉にしていらつしやつたから、姫君が気の毒な一人ぼつちでも私は世話をし  
てあげないのだよ」

などという悪態口も侍従に聞かせながら、時々侍従に手紙を持たせてよこした。初めから地方官級の家に生まれた人は、貴族を  
まねて、思想的にも思い上がった人になつている者も多いのに、  
この夫人は貴族の出でありながら、下の階級へはいつて行く運命

を生まれながらに持つていたものか、卑しい性格の叔母君であつた。自身が、家門の顔汚しのように思われていた昔の腹いせに、常陸ひたちの宮の女王を自身の娘たちの女房にしてやりたい、昔風なところはありますが氣だてのよい後見役ができるであろうとこんなことを思つて、

時々私の宅へもおいでくださつたらいかがですか。あなたのお琴の音ねも伺いたがる娘たちもおります。

と言つて来た。これを実現させようと叔母は侍従にも促すのであるが、末摘花は負けじ魂からではなく、ただ恥ずかしくきまりが悪いために、叔母の招待に応じようとしないので、叔母のほうではなくやくしく思つていた。そのうちに叔母の良人おととが九州の大貳だいにに

任命された。娘たちをそれぞれ結婚させておいて、夫婦で任地へ立とうとする時にもまだ叔母は女王を伴って行きたがつて、

「遠方へ行くことになりますと、あなたが心細い暮らしをしておいでになるのを捨てておくことが気になってなりません。ただ今までもお構いはしませんでしたが、近い所にいるうちはいつでもお力になれる自信がありましたので」

と体裁よく言<sup>こと</sup>づつて誘いかけるのも、女王が聞き入れないから、「まあ憎らしい。いばつていらつしやる。自分だけはえらいつもりでも、あの藪<sup>やぶ</sup>の中の人を大将さんだつて奥様らしくは扱つてくださらないだろう」

と言つてののしつた。そのうちに源氏宥<sup>ゆうめん</sup>免の宣旨が下り、帰

京の段になると、忠実に待つていた志操の堅さをだれよりも先に認められようとする男女に、それぞれ有形無形の代償を喜んで源氏の払った時期にも、末摘花だけは思い出されることもなくて幾月かがそのうちたった。もう何の望みもかけられない。長い間不幸な境遇に落ちていた源氏のために、その勢力が宮廷に復活する日があるようにと念じ暮らしたものであるのに、賤いやしい階級の人でさえも源氏の再び得た輝かしい地位を喜んでいる時にも、ただよそのこととして聞いていねばならぬ自分でなければならなかつたか、源氏が京から追われた時には自分一人の不幸のように悲しんだが、この世はこんな不公平なものであるのかと思つて末摘花は恨めしく苦しく切なく一人で泣いてばかりいた。

大弐の夫人は、私の言ったとおりじゃないか。どうしてあんな見る影もない人を源氏の君が奥様の一人だとお思になるものかね、仏様だって罪の軽い者ほどよく導いてくださるのだ。手もつけられないほどの貧乏女でいて、いばつていて、宮様や奥さんのいらつしやつた時と同じように思い上がっているのだから始末が悪いなどと思つていつそうけいべつ軽蔑的に末摘花を見た。

「ぜひ決心をして九州へおいでなさい。世の中が悲しくなる時には、人は進んでも旅へ出るではありませんか。田舎いなかとはいやな所のようにお思いになるかしりませんが、私は受け合つてあなたを楽しくさせます」

口前よく熱心に同行を促すと、貧乏に飽いた女房などは、

「そうなければいいのに、何のたのむ所もない方が、どうしてまた意地をお張りになるのだろう」

と言つて、末摘花を批難した。侍従も大弐の甥おいのような男の愛人になつていて、京へ残ることもできない立場から、その意志でもなく女王のもとを去つて九州行きをすることになつていた。

「京へお置きして参ることは気がかりでなりませんからいらつしやいませ」

と誘うのであるが、女王の心はなお忘れられた形になつている源氏を頼みにしていた。どんなに時がたつても自分の思い出される機会のないわけではない、あれほど堅い誓いを自分にしてくれた人の心は変わつていないはずであるが、自分の運の悪いために捨

てられたとも人からは見られるようなことになっていたのであるう、風の便りたよでも自分の哀れな生活が源氏の耳にはいれればきつと救つてくれるに違いないと、これはずっと以前から女王の信じているところであつて、邸やしきも家も昔に倍した荒廢のしかたではあるが、部屋の中の道具類をそこばくの金に変えていくようなことは、源氏の来た時に不都合であるからと忍耐を続けているのである。気をめいらせて泣いている時のほうが多い末摘花の顔は、一つの木の実だけを大事に顔に当てて持つている仙せん人にんとも言つてよい奇怪な物に見えて、異性の興味を惹ひく価値などはない。気の毒であるからくわしい描写はしないことにする。

冬にはいればはいるほど頼りなさはひどくなって、悲しく物思

いばかりして暮らす女王だった。源氏のほうでは故院のための盛んな八講を催して、世間がそれに湧き立っていた。僧などは平凡な者を呼ばずに学問と徳行のすぐれたのを選んで招じたその物事に、女王の兄の禅師も出た帰りに妹君を訪ねて来た。

「源大納言さんの八講に行つたのです。たいへんな準備でね、この世の浄土のように法要の場所はできていましたよ。音楽も舞樂もたいしたものでしたよ。あの方はきつと仏様の化身だろう、五濁じよくの世にどうして生まれておいでになつたらう」

こんな話をして禅師はすぐに帰つた。普通の兄きようだい弟ていのように話し合わない二人であるから、生活苦も末摘花すえつむはなは訴えることができないのである。それにしてもこの不幸なみじめな女を捨て

て置くというのは、情けない仏様であると末摘花は恨めしかった。こんな気のした時から、自分はもう顧みられる望みがないのだからとようやく思うようになった。

そんなころであるが大弐の夫人が突然訪ねて来た。平生はそれほど親密にはしていないのであるが、つれて行きたい心から、作った女王の衣裳いしやうなども持って、よい車に乗って来た得意な顔の夫人がにわかには常陸の宮邸へ現われたのである。門をあけさせている時から目にはいつてくるものは荒廃そのもののような寂しい庭であった。門の扉も安定がなくなっていて倒れたのを、供の者が立て直したりする騒ぎである。この草の中にもどこかに三つだけけの道はついているはずであると皆が捜した。そしてやっと建物

の南向きの縁の所へ車を着けた。

きまりの悪い迷惑なことと思ひながら女王は侍従を応接に出した。すす煤けたきちよう几帳を押し出しながら侍従は客と対したのである。ようぼう容貌は以前に比べてよほど衰えていた。しかしやつれながらもきれいで、女王の顔に代えたい気がする。

「もう出発しなければならぬのですが、こちらのことが気がかりなものですから、今日は侍従の迎えがてらお訪ねたずしました。私の好意をくんでくださらないで、御自分がちよつとでも来てくださることを御承知にならないことはやむをえません、せめて侍従だけをよこしていただくお許しをいただきに来たのです。まあお気の毒なふうで暮らしていらつしやるのですね」

こう言ったのであるから、続いて泣いてみせねばならないのであるが、実は大弐夫人は九州の長官夫人になって出発して行く希望に燃えているのである。

「宮様がおいでになったところ、私の結婚相手が悪いからって、交際するのをおきらいになったものですから、私らもつかいかけ離れた冷淡なふうになっていましたもの、それからこちら様は源氏の大将さんなどと御結婚をなさるような御幸運でいらつしやいましたから、晴れがましくしてお出入りもしにくかったです。しかし人間世界は幸福なことばかりもありませんからね、その中でわれわれ階級の者がかえって気楽なんですよ。及びもない懸隔のあるお家うちでしたが、こちらはお気の毒なことになってしまいました

て、私も心配なんです。近くにおりますうちは、何かの場合に力にもなれると思つていましたものの、遠い所へ出て行くことになりますと、とてもあなたのことが気になつてなりません」

と夫人は言うのであるが、女王は心の動いたふうもなかつた。

「御好意はうれしいのですが、人並みの人にもなれない私はこのままここで死んで行くのが何よりもよく似合うことだろうと思ひます」

とだけ末摘花は言う。

「それはそうお思ひになるのはごもつともですが、生きている人間であつて、こんなひどい場所に住んでいるのなどはほかにめつたにないでしょう。大将さんが修繕をしてくださつたら、またも

う一度玉の台にもなるでしよううてなと期待されますがね。近ごろはど  
うしたことでしよう、兵部卿ひょうぶきょうの宮の姫君のほかはだれも嫌きらい  
になっておしまいになったふうですね。昔から恋愛関係をたくさ  
ん持っていていらつしやった方でしたが、それも皆清算しておしま  
いになりましたみさおつてね。ましてこんなみじめな生き方をしていらつ  
しやる人を、操を立てて自分を待っていてくれたかと受け入れて  
くださることはむずかしいでしょうね」

こんなよけいなことまで言われてみると、そうであるかもしれ  
ないと末摘花は悲しく泣き入ってしまった。しかも九州行きを肯うべな  
うふうは微塵みじんもない。夫人はいろいろと誘惑を試みたあとで、

「では侍従だけでも」

と日の暮れていくのを見てせきたてた。侍従は名残なごりを惜しむ間もなく、泣く泣く女王にょおうに、

「それでは、今日はあんなにおつしやいますから、お送りにだけついてまいります。あちらがああおつしやるのももつともですし、あなた様が行きたく思おほしめ召さないのも御無理だとは思われませんし、私は中に立ってつらくてなりませんから」

と言う。この人までも女王を捨てて行こうとするのを、恨めしくも悲しくも末摘花は思うのであるが、引き止めようもなくただ泣くばかりであった。形見に与えたい衣服も皆悪くなっていて長い間のこの人の好意に酬むくいる物がなくて、末摘花は自身の抜け毛を集めて鬢かざらにした九尺ぐらいの髪かみの美しいのを、雅味のある箱

に入れて、昔のよい薫くんこう香こう一壺つぼをそれにつけて侍従へ贈った。

「絶ゆまじきすぢを頼みし玉かづら思ひのほかにかけ離れぬる

死んだ乳母まが遺言したこともあるからね、つまらない私だけれど一生あなたの世話をしたいと思っていた。あなたが捨ててしまうのももつともだけれど、だれがあなたの代わりになって私を慰めてくれる者があると思つて立つて行くのだらうと思つて恨めしいのよ」

と言つて、女王は非常に泣いた。侍従も涙でものが言えないほどになつていた。

「乳母まが申し上げましたことはむろんでございますが、そのほかにもごいっしよに長い間苦勞をしてまいりましたのに、思いがけない縁に引かれて、しかも遠方へまで行ってしまいますとは」と言つて、また、

「玉かづら絶えてもやまじ行く道のたむけの神もかけて誓はん命のございます間はあなた様に誠意をお見せします」  
などとも言ふ。

「侍従はどうしました。暗くなりましたよ」  
と大弐夫人だいにに小言こごとを言われて、侍従は夢中で車に乗ってしまつ

た。そしてあとばかりが顧みられた。困りながらも長い間離れて行かなかつた人が、こんなふうにして別れて行つたことで、女王はますます心細くなつた。だれも雇い手のないような老いた女房までが、

「もつともですよ。どうしてこのままいられるものですか。私たちだつてもう我慢ができませんよ」

こんなことを言つて、ほかへ勤める手蔓てづるを捜し始めて、ここを出る決心をしたらしいことを言い合うのを聞くことも未摘花の身にはつらいことであつた。十一月になると雪や霰みぞれの日が多くなつて、ほかの所では消えている間があつても、ここでは丈の高い枯れた雑草の蔭かげなどに深く積もつたものは量かさが高くなるばかりで越こし

の白<sup>はくせん</sup>山をそこに置いた気がする庭を、今はもうだれ一人出入りする下男もなかった。こんな中につれづれな日を送るよりしかたのない末摘花の女王であつた。泣き合い笑い合うこともあつた侍従がいなくなつてからは、夜の塵<sup>ちり</sup>のかかつた帳台の中でただ一人寂しい思いをして寝た。

源氏は長くこがれ続けた紫夫人のもとへ帰りえた満足感が大きくて、ただの恋人たちの所などへは足が向かない時期でもあつたから、常陸<sup>ひたち</sup>の宮の女王はまだ生きているだろうかというほどのことは時々心に上らないことはなかつたが、捜し出してやりたいと思うことも、急ぐことと思われないうちにその年も暮れた。四月ごろに花散里<sup>はなちるさと</sup>を訪ねて見たくなつて夫人の了解を得てから

源氏は二条の院を出た。幾日か続いた雨の残り雨らしいものが降  
つてやんだあとで月が出てきた。青春時代の忍び歩きの思い出さ  
れる艶えんな夕月夜であつた。車の中の源氏は昔をうつらうつらと幻  
に見ていると、形もないほどに荒れた大木が森のような邸やしきの前に  
来た。高い松に藤ふじがかかつて月の光に花のなびくのが見え、風と  
いっしょにその香がなつかしく送られてくる。橘たちばなとはまた違つた  
感じのする花の香に心が惹ひかれて、車から少し顔を出すようにし  
てながめると、長く枝をたれた柳も、土塀どべいのない自由さに乱れ合  
つていた。見たことのある木立ちであると源氏は思ったが、以前  
の常陸の宮であることに気がついた。源氏は物哀れな気持ちにな  
つて車を止めさせた。例の惟これみつ光はこんな微行にはずれたことの

ない男で、ついて来ていた。

「ここは常陸の宮だったね」

「さようでございます」

「ここにいた人がまだ住んでいるかもしれない。私は訪ねてやらねばならないのだが、わざわざ出かけることもたいそうになるから、この機会に、もしその人がいれば逢ってみよう。はいって行って尋ねて来てくれ。住み主がだれであるかを聞いてから私のことを言わないと恥をかくよ」

と源氏は言った。

末摘花の君は物惱ましい初夏の日に、その昼間うたた寝をした時の夢に父宮を見て、さめてからも名残なごりの思いにとらわれて、悲

しみながら雨の洩もつて濡ぬれた廂ひさしの室の端のほうを拭ふかせたり部屋の中を片づけさせたりなどして、平生にも似ず歌を思つてみたのである。

亡なき人を恋たもとふる袂たもとのほどなきに荒れたる軒しづくの雫しづくさへ添つくふ

こんなふうには、寂しさを書いていた時が、源氏の車の止められた時であつた。

惟光は邸の中へはいつてあちらこちらと歩いて見て、人のいる物音の聞こえる所があるかと捜したのであるが、そんな物はない。自分の想像どおりにだれもない、自分は往ゆき返りにこの邸やしきは見

るが、人の住んでいる所とは思われなかつたのだからと思つて惟光が足を返そうとする時に、月が明るくさし出したので、もう一度見ると、格子こうしを二間ほど上げて、その御簾みすは人ありげに動いていた。これが目にはいつた刹那せつなは恐ろしい気さえしたが、寄つて行つて声をかけると、老人らしく咳せきを先に立てて答える女があつた。

「いらつしやつたのはどなたですか」

これみつ  
惟光は自分の名を告げてから、

「侍従さんという方にちよつとお目にかかりたいのですが」

と言つた。

「その人はよそへ行きました。けれども侍従の仲間の者がおりま

す」

と言う声は、昔よりもずっと老人じみてきてはいるが、聞き覚えのある声であつた。家の中の人は惟光が何であつたかを忘れていた。狩かりぎぬ衣姿の男がそつとはいつて来て、柔らかな調子でものを言うのであつたから、あるいは狐きつねか何かではないかと思つたが、惟光が近づいて行つて、

「確かなことをお聞かせくださいませんか。こちら様が昔のままでおいでになるかどうかお聞かせください。私の主人のほうでは変心も何もしておいでにならない御様子です。今晚も門をお通りになつて、訪ねてみたいと思召すふうで車を止めておいでになります。どうお返辞をすればいいでしょう、ありのままのお話を私に

は御遠慮なくして下さい」

と言うと、女たちは笑い出した。

「変わっていらつしやればこんなお邸にそのまま住んでおいでになるはずありません。御推察なさいましてあなたからよろしくお返辞を申し上げてください。私どものような老人でさえ経験したことのないような苦しみをなめて今日までお待ちになったのでございますよ」

女たちは惟光にもっともつと話したいというふうであったが、惟光は迷惑に思つて、

「いやわかりました。ともかくそう申し上げます」  
と言ひ残して出て来た。

「なぜ長くかかったの、どうだったかね、昔の路みちを見いだせないよよもぎがはら  
蓬原よもぎがはらになつているね」

源氏に問われて惟光は初めからの報告をするのであつた。

「そんなふうにして、やっと人間を発見したのでございます。侍従の叔母おばで少将とか申しました老人が昔の声で話しました」

惟光はなお目に見た邸内の様子をくわしく言う。源氏は非常に哀れに思った。この廃邸じみた家に、どんな気持ちで住んでいることであろう、それを自分は今まで捨てていたと思うと、源氏は自分ながらも冷酷であつたと省みられるのであつた。

「どうしようかね、こんなふうに出かけて来ることも近ごろは容易でないのだから、この機会でなくては訪ねられないだろう。す

べてのことをそつごう綜合して考えてみても昔のままに独身でいる想像のつく人だ」

と源氏は言いながらも、この邸へはいつて行くことにはなお躑ち

ゆうちよ

躑ちよがされた。この実感からよい歌を詠よんでまず贈りたい気の

する場合であるが、機敏に返歌のできないことも昔のままであつたなら、待たされる使いがどんなに迷惑をするかしのれないと思つてそれはやめることにした。惟光も源氏がすぐにはいつて行くこととは不可能だと思つた。

「とても中をお歩きになれないほどの露でございます。よもぎ蓬を少し払わせましてからおおいでになりましたら」

このこれみつ惟光の言葉を聞いて、源氏は、

尋ねてもわれこそ訪はめ道もなく深き蓬のものと心を

と口ずさんだが、やはり車からすぐに下りてしまった。惟光は草の露を馬の鞭で払いながら案内した。木の枝から散る雫も秋の時雨のように荒く降るので、傘を源氏にさしかけさせた。惟光が、「木の下露は雨にまされり（みさぶらひ御笠と申せ宮城野の）でございます」

と言う。源氏の指貫の裾はひどく濡れた。昔でさえあるかないかであった中門などは影もなくなっている。家の中へはいるのもむき出しな気のすることであったが、だれも人は見ていなかった

た。

によおう

女王は望みをかけて来たことの事実になつたことはうれしか

つたが、りっぱな姿の源氏に見られる自分を恥ずかしく思った。

だいに

大貳の夫人の贈つた衣服はそれまで、いやな気がしてよく見よう

ともしなかつたのを、女房らが香を入れる唐櫃からびつにしまつて置い

たからよい香のついたのに、その人々からしかたなしに着かえさ

せられて、すす煤けた几帳きちょうを引き寄せてすわつていた。源氏は座に

着いてから言つた。

「長くお逢いしないでも、私の心だけは変わらずにあなたを思つていたのですが、何ともあなたが言つてくださらないものだから、恨めしくて、今までためすつもりで冷淡を装つていたのですよ。」

しかし、三輪みわの杉すぎではないが、この前の木立ちを目に見ると素通りがきちようできなくてね、私から負けて出ることになりましたよ」

几帳きちようの垂たれ絹を少し手であけて見ると、女王は例のようにただ恥はずずかしそうにすわっていて、すぐに返辞はようしない。こんな住居すまいにまで訪たずねて来た源氏の志の身にしむことによつてやつと力ちからづいて何かを少し言つた。

「こんな草原の中で、ほかの望みも起こさずに待っていてください。つたのだから私は幸福を感じる。またあなただつて、あなたの近ごろの心持ちもよく聞かないままで、自分の愛から推して、愛を持っていてくださると信じて訪ねて来た私を何と思えますか。今日まであなたに苦勞をさせておいたことも、私の心からのことで

なくて、その時は世の中の事情が悪かったのだと思つて許してくださるでしょう。今後の私が誠実の欠けたようなことをすれば、その時は私が十分に責任を負いますよ」

などと、それほどに思わぬことも、女を感動さすべく源氏は言つた。泊まつて行くこともこの家の様子と自身とが調和の取れないことを思つて、もつともらしく口実を作つて源氏は帰ろうとした。自身の植えた松ではないが、昔に比べて高くなつた木を見ても、年月の長い隔たりが源氏に思われた。そして源氏の自身の今日の身の上と逆境にいたころとが思い比べられもした。

「ふじなみ藤波の打ち過ぎがたく見えつるはまつこそ宿のしるしなり

けれ

数えてみればずいぶん長い月日になることでしょうね。物哀れになりますよ。またゆるりと悲しい旅人だった時代の話も聞かせに来ましょう。あなたもどんなに苦しかったかという辛苦の跡も、私でなくては聞かせる人がないでしょう。とまちがいかもしれぬが私は信じているのですよ」

などと源氏が言うのと、

年を経て待つしるしなきわが宿は花のたよりに過ぎぬばかり  
か

と低い声で女王は言った。身じろぎに知れる姿も、袖そでに含んだにおいも昔よりは感じよくなつた気がすると源氏は思った。落ちようとする月の光が西の妻戸の開いた口からさしてきて、その向こうにあるはずの廊もなくなつていたし、廂ひさしの板もすっかり取れた家であるから、明るく室内が見渡された。昔のままに飾りつけないのそろつてゐることは、忍ぶ草のおい茂つた外見よりも風流に見えるのであつた。昔の小説に親の作つた堂を毀こぼつた話もあるが、これは親のしたまを長く保つていく人として心の惹ひかれるところがある。源氏は思った。この人の差しゅうち恥心の多いところもさすがに貴女きじよであるとうなずかれて、この人を一生風変わりな愛人と

思おうとした考えも、いろいろなことに紛れて忘れてしまつていたころ、この人はどんなに恨めしく思つたであろうと哀れに思われた。ここを出てから源氏の訪ねて行つた花散里も、美しい派手な女というのではなかつたから、末摘花の醜さも比較して考えられることがなく済んだのであらうと思われる。

賀茂祭り、齋院の御禊ごけいなどのあるころは、その用意の品という名義で諸方から源氏へ送つて来る物の多いのを、源氏はまたあちらこちらへ分配した。その中でも常陸の宮へ贈るのは、源氏自身が何かと指図さしずをして、宮邸に足らぬ物を何かと多く加えさせた。親しい家司けいしに命じて下男などを宮家へやつて邸内の手入れをさせた。庭の蓬よもぎを刈らせ、応急に土塀どべいの代わりの板塀を作らせなどし

た。源氏が妻と認めての待遇をし出したと世間から見られるのは不名誉な気がして、自身で訪ねて行くことはなかつた。手紙はこまごまと書いて送ることを怠らない。二条の院にすぐ近い地所へこのごろ建築させている家のことを、源氏は末摘花に告げて、

そこへあなたを迎えようと思う、今から童女として使うのよ  
い子供を選んで馴ならしておおきなさい。

ともその手紙には書いてあつた。女房たちの着料までも気をつけて送つて来る源氏に感謝して、それらの人々は源氏の二条の院のほうを向いて拝んでいた。一時的の恋にも平凡な女を相手にしなかつた源氏で、ある特色の備わつた女性には興味を持って熱心に愛する人として源氏をだれも知つていたのであるが、何一つす

ぐれた所のない末摘花をなぜ妻の一人としてこんな取り扱いをするのであろう。これも前生の因縁ごとであるに違いない。もう暗い前途があるばかりのように見切りをつけて、女王の家を去った人々、それは上から下まで幾人もある旧召使が、われもわれもと再勤を願って来た。善良さは稀まれに見るほどの女性である末摘花のもとに使われて、気楽に暮らした女房たちが、ただの地方官の家などに雇われて、気まずいことの多いのにあきれて帰って来る者もある。見えすいたような追従も皆言ってくる。昔よりいつそう強い勢力を得ている源氏は、思いやりも深くなつた今の心から、扶たすけ起すこそうとしている女王の家は、人影もにぎやかに見えてきて、繁しげりほうだいですごいものに見えた木や草も整理されて、流

れに水の通るようになり、立ち木や草の姿も優美に清い感じのするものになっていった。職を欲し<sup>ほ</sup>がっている下家<sup>しもけいし</sup>司級の人は、源氏が一人の夫人の家として世話をやく様子を見て、仕えたいと申し込んで来て、宮家に執事もできた。

末摘花は二年ほどこの家において、のちには東の院へ源氏に迎えられる、夫婦として同室に暮らすようなことはめつたになかったのであるが、近い所であつたから、ほかの用で来た時に話して行くようなことくらいはよくして、<sup>けいべつ</sup>軽蔑した扱いは少しもしなかつたのである。大弍の夫人が帰京した時に、どんな驚き方をしたか、侍従が女王の幸福を喜びながらも、時が待ち切れずに姫君を捨てて行った自身のあやまちをどんなに悔いたかというようなことも、

もう少し述べておきたいのであるが、筆者は頭が痛くなってきたから、またほかの機会に思い出して書くことにする。



# 青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 上巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年8月10日改版初版発行

1994（平成6）年12月20日56版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年4月5日71版を使用しました。

入力：上田英代

校正：伊藤時也

2003年5月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 源氏物語

蓬生

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>